

撤退田園

いなだそういちろう

稻田宗一郎



三月のある日、JAで政府の農地中間管理機構の説明会があり、賢一も参加した。この事業は、政府が農家から農地を借り上げ、この借り上げた農地を農業への新規参入を考えている全国の法人に貸出し、積極的に大規模農業経営を推進しようというものであった。

JA側は営農課長補佐の遠藤功と係長の井上昌二が新事業の説明役となり出席していた。

「賢一、お前の集落も機構の対象地域になったんだな」

隣に座った茂が話かけてきた。茂は東京の農業大学に進学し、卒業と同時に実家に就農し農業法人を経営していた。

「アー、ソウダ。俺の集落は機構の指定を受け、茂も知っている牧野のおっさんと村越のおっさんと何人かの爺ちゃんが貸手で手を挙げている」

「そうか、俺の集落も、佐藤のおっさんと小沢のおっさんが貸側で手

をあげ、俺が借り手で手を挙げている。F県は、貸し手と借り手がセットにならないと機構は受けないみたいだな」

「どうも、そうみたいだ。ところで、茂、お前の地区では地域集積協力金はどうなっている」

「俺のところは、アグリ吉島と俺の所にくるみたいだ。お前のところは」

「俺のライスランド西川が引き受ける。集めた補助金は積極的な投資に使う予定さ。今度の政策で農地市場にもやっと競争原理が導入される。竹園教授が言っていた通りになってきた」

「竹園教授って、今回の農業改革を立案した産業競争力会議の竹園だろ。その竹園が賢一の大学時代の先生だったのか？」

茂は驚いように聞いた。

「そうさ、竹園教授は俺の先生だ。今回の農業改革は、まさに、先生の予想通りになった」

賢一は誇らしげに答え、

「このことは地元では誰も知らん。茂も秘密にしといてくれ」と続けた。

茂はこの話を聞いてやっと賢一の行動が理解できた。賢一が大手流通企業をやめ実家の農業を就いた時に、茂は農協青年部に賢一を誘ったことがあった。しかし、賢一は茂の誘いを断り、「俺は青年部には入らん」ときっぱり言い切り、一人で規模を拡大していった。また、たまに、二人で飲んだ時などに酩酊すると、「競争原理だとか」「市場原理だとか」訳の分からぬことを繰り返し、「俺は俺のやり方で西川農業を守る」、「お前ら農協派はなっとらん」とか毒づいていたのだ。しかし、農協主催の営農関連などの説明会があれば、賢一は必ず出席し、カメ虫防除用農薬散布や畔の草刈りなどの共同作業には集落の仲間と一緒に協力は惜しまなかつた。

「わかった、詳しいことはこの説明会が終わったあと、一杯やりながら話そう。功と『喜楽』で一杯やることになっているから、賢一も来いよ」

「そうだな。久しぶりに皆で一杯やるか」

『喜楽』に集まったのは、賢一、茂、功、昌二と長老格の惣右衛門だった。店の名物である牛肉の切り落としの煮込みと鯨のベーコンを肴に農地集積の話になっていた。

「功、経営転換金の補助金について聞いてもいいか」

と茂が切りだした。

「転換金の何が知りたい？」

功が答えた。

「功のさっきの説明によると、この補助金は離農しなくても貰えるんだな」

「そうだ、離農しなくてもOKだ」

「と言うことは、たとえば、俺は、法善寺地区で、転作でソバを55a作っているが、これをやめて、この土地を機構に貸し出せば、50万円の補助金がもらえるってことか」

「アー、そう言うことだ。多くの農家はこの転換金を目当てに捨てつくりの農地を機構に貸出すと思うよ。霞が関は、まったく現場と農家のことはわかつてないからな」

功は困ったような調子で言った。

「霞が関の人間は都会の人間と農村の人間は同じ金の原理で動くと信じている」

と続け、

「そうさ、やつらは農家のしたたかさを全くわかつてない」

と茂も続けた。

功も茂も、農村の人間は都会の人間よりも「金に細かく」、補助金がでればその補助金を貰うべく、あらゆる知恵を働かせ、見栄も何も考えずひたすら自分のふところを優先させる気質を持っていることを知っていた。

「本当だよな。霞が関と永田町の連中ときたら、農業の現場の話なんてほとんど理解していない」

今までひと言も喋っていなかった昌二が珍しくやや強い口調で言った。

「この前、農協青年部が推薦している舟木代議士と話したら、霞が関に入る情報は、現場を知ったような顔をしている一部の学者や利益誘導者からだと言っていた」

「本当か？ 舟木議員はそんなことを言っていたか？」

「ああ、この前、舟木議員と会ったとき聞いた話だ。おまけに、マスコミもやつらの仲間でやつらに都合の良い記事を載せるって言っていた」

「舟木議員がね……」

「そう言えば、東都経済産業新聞は、『攻めの農業政策』に協力的でアンチ農協の農業法人の記事なんかは積極的に取り上げるのに、農協についてはほとんど批判的な記事ばかり書いているからな」

「…………」

茂、功、昌二の表情が、一瞬、暗くなったようだった。

「お前らアホか、お前らは国のやることに対するいつも否定的な考えをする」

賢一が少し顔を赤らめて言った。

「否定的な考え？ それって何だよ」

茂が即座に反応した。

「そうだな……」

賢一は少し考え、

「たとえば、国がやろうとしている農協改革を考えてみろ。農協は本当に改革ができると思うか？ 功、お前、どう思う？」

「たぶん、農協だけでは改革は無理かもな。改革どころか、多くの役員や職員は農協が危機だって言う意識が全くないからな」

「それ、みろ、俺の言ったとおりじゃないか」

「確かに。俺からみても農協職員は融通が利かないって言うか、能力がないのか、問題の本質が見えずに、ただ、目先のことだけをみているな」

功は昌二を見ながら言った。昌二も頷きながら、

「確かに功の言う事は正しいと思う。俺は、コメの生産指導が担当だけど、この前、上層部にITを活用した新しい営農指導案を提案したら、『井上、農協の営農指導は組合員と顔をあわせ良く話合うことだからな。お前の言っているITを活用した圃場管理なんて上手く行くはずはないよ。もっと、組合員を見ろ』だってさ」

と両手でお手上げのような仕草をしながら言った。

「昌二、お前の指摘は正しいよ」

茂がサポートした。

茂は、青年部の連中はITとかタブレットとかの新しい技術に興味をもっており、これらの技術を活用しようとしていることを知っていた。

「そうでしょ、茂ちゃん。なのに、部長を始め担当常務なんかは、『井上の提案は、今までやったことがないから危険がありすぎる。そんな案には予算は組めない』って、俺の提案は却下よ」

「そうだろ、昌二、お前ら農協は考えが古い。既得利権に胡坐をかいしているだけだ。だから、規模が大きい農家は農協から離れていくのさ」

賢一はコップの底に残っている酒を一気に飲み干した。

「でもな、農協が全て悪いわけじゃないよ。そのくらいは、賢一だってわかっているだろ」

功は黙ってグラスに口につけた。

「いや俺だって農協が全て悪いと思っていないさ。俺が言いたいのは、マスコミの言っていることもある意味正しいってことさ」

「どういうことだ？」

「事実として日本の稻作農業が規模拡大していないのは、従来の農業に対する考え方方が古く、規制改革が必要だって点さ。だから農業所得が増えないのさ」

賢一は確信した口調になった。

功と賢一の話を大きく頷きながら聞いていた茂は、皮肉を込めた口調で話を引き取った。

「賢一の言うことも少しは理解できるさ、でもな、賢一、昔から国の言うことを聞いていたら良いことはなかったじゃないか」

「確かに、茂の言うとおり、今まで、その傾向があったことは俺も認める」

「そうだろ、政府の政策がコロコロ変わりすぎている。最近だって、個別所得補償だろ。今回の機構事業だって前の農地集積円滑化事業と基本的には変わっていないよ」

「要するに政策の一貫性がないってことを言いたいんだろ、茂」

「そうさ、これじゃ、一番困るのは我々農家だよ」

茂は大きく頷きながら続けた。

「たとえば、政府がコメの価格を12,000円で10年間固定する政策をやってくれたら、俺だって、機構の制度を積極的に利用し、政府が言う『攻めの農業』のための経営戦略を立てることはできるさ」

「確かにそうだ、でもな、茂、今回の農業改革は、おそらく、ぶれないとはずだ」

「どうして、そう言える？」

「政策の基本が市場原理と規制改革だからだ。この基本は、今後変わらない。いや、日本はそうならないと国際社会で生きていけないからだ」

「しかし、俺は、国の言う事は信じない。今回の政策には必ず裏がある。地域の農業は地域に暮らしている俺たちが守るしかないんだ。都会の人間がなぜ地域を守る責任と義務がある？」

茂は同意を求めるように、

「なあ」

と功の肩を叩き、

「都会の人間が地域を守ることなんであるはずないじゃないか。だから、俺は功と昌二と一緒に農協を改革し地域の農業を支える。地域の農業がなくなれば農協もなくなるのだから俺と農協の利害は一致するからな」と続けた。

「わかったよ、茂、お前はそれでやれよ。俺は補助金も含め国を徹底的に利用し自分の経営を守る。功には悪いけど、売先も農協ではなくロイズやリゾンなどと組む」

賢一は自らを鼓舞するように力強く言った。賢一がこう言い切ったのには理由があった。ロイズファームから共同出資の話が来ていたからである。ロイズファームはP県名島市の4haの耕作放棄地を機構を通して借りることになっていた。しかし、地主が75歳の高齢農家で、設立する農業法人の役員にはなれるものの、実質的な経営はできなかった。ロイズファームはツテを使い賢一に接近し、共同出資で農業法人を立ち上げないかと誘ってきたのである。1,000万円の出資金は折半でということであった。賢一はこの話に前向きだったのである。

つづく